

説話教材の取り扱い

——ひとつの試み——

下 田 忠

I はじめに

教育のすべてが問いなおされようとしている今日、古典教育はどのような課題をにない、どのような展望のもとに進めていけばよいのか。その方向をさぐるうとするのが昭和四十六年度広島大学国語国文学会秋季研究会、国語教育研究協議会であった。

特に説話教材を中心に、その扱い方をめぐって、「古典が高校生にどう受けとめられ、どんな意味を持っているのか。教師はどんな教材を、どんな視点から選び、どう教えようとしているのか。またそこにどんな問題が生じているのか、その問題をどう解決していけばよいのか。」といったことを具体的に考えようと意図されたものであった。

現代高校生の精神的荒廃状態が指摘され、問題追求の姿勢が失われていると言われる中で、われわれ国語教師は古典の教室で、いったいどんな役割を果たせるのであろうか。古典文学の遺産によって学習者の思考力をきたえ、人間的内容をふとらせるために役立つ手だてを何とかして捻出すべく苦悩してみなくてはなるまい。

次に述べるものは、このたびの研究協議会を契機に、わたし自身のこれまでの古典の教室の歩み—そのうち説話教材の扱い—をふり返り、その反省にもとづいて新たなひとつの試みを実践して、考えたことがらである。

II これまでの説話教材学習指導の記録

説話教材は、従来の教科書にあまり多くは取りあげられていないといえよう。取りあげられている場合は、学習者をおもしろがらせて古典への興味をいだかせるため、興味あるもので短くてやさしいものが選ばれ、配列も古文入門期にあてられているものが多かった。これまで、説話文学の文学としての性格構造・価値が物語や和歌や俳諧などのように正当な認識と評価をえていないところに、その根本の原因はあるのかも知れない。

最近六年間（昭和四十年～四十五年度）にわたしが実践した説話をふり返ってみてもそのことが裏付けられる。この六年間に扱った説話教材に関する学習指導の記録をみると次のようになってい

これまで(四十年年度)四十五年年度)に実践した学習指導の記録(説話教材に関する記録の抜粋)

40	年	度	年
第 1 学 年		1 学 期	
二 説 話 (東 書)			単元
C 信濃守藤原 陳忠御坂よ り落ち入る 物語 (今昔物語)	B 能説房の説 法のこと (沙石集)	A 絵仏師良秀 (十訓抄)	教 材
② 受領というもの に対する作者の 考えをつかませ る	① 話の構成をつか ませる ② 能説房と尼公の 心理の動きをと らえさせる	① あらすじをとら えさせる ② 良秀の人物につ いて考えさせる	目 標
(3) (2) (1) あらすじをとらえる中で、情景の生き 生きと描かれているところをとり出す 御目代の皮肉の意味をとらえる 守の言動や、結びの段落(作者がはっ きりと顔をのぞかせる)で、当時の受領 を作者はどういう型の人間としてとら えているか、意見を述べる	(2) 能説房と尼公、民衆の心理をつかみ、 この話のおもしろみを発見する	(4) (3) あらすじを述べる 良秀の人物について感想を述べる	学 習 活 動 の 主 な も の
「池の尾禪智内供 の鼻のこと」 (今昔物語卷二八 第二〇話) 補助プリント		芥川竜之介 「地獄変」につ いてふれる	備 考

43 年 度	42 年 度
第 1 学 年 2 学 期	第 3 学 年 1 学 期
小 説 (筑摩現国)	一 古代の文学 (一) (東書)
羅 生 門	倭建命 (古事記) いわゆる (遊離説話)
③ 作品に対する感想や批評をまとめ、文章化する ② 下人の性格心理を考える中で作者の想像力や思想を読みとらせる ① 構成を考えさせる	② 古代人の信仰や生活について理解を深めさせる ① 読解を通して上代の語法のあらましを理解させる
(発展学習としての上記目標④についての ② 「羅生門」と今昔物語の説話との関係を考える ① 今昔物語巻二十九第十八話「羅城門の上層に登りて死人を見たる盗人のこと」の比較 ① 主人公について当初の境遇設定のちがいが ② 老婆が髪の毛を抜く対象になつてい	(1) 「古事記」の成立事情を、その序文(補助プリント)から読みとる中でこの作品の性格をとらえる (2) 上代の語法を平安文法との比較のうえで理解しながら解釈し、各段落の要旨をまとめる (3) 話の中から古代人の信仰に関すると思われる部分を指摘し、その信仰の特色をつかむ (4) 話の中から地名起源説話というべきものを抜き出す (5) 主人公の浪漫性について話し合い、その悲劇性については理由を考える
上記学習活動(1)の②については芥川の素材とした今昔物語巻三十一第三	「須佐之男命の大蛇退治」 「稲羽の素戔」 「海幸彦と山幸彦」の話などを紹介する

45 年 度		
第 1 学 年		1 学 期
古 文 入 門 (角 川)		
B 百人一首	A 鈴鹿山において、蜂、盗人を刺し殺しし語 (今昔物語)	
③ ② ① 歌の心を素材背景との関係においてとらえさせる	① 話の運び方の巧みさをつかませる	④ 力をつけさせる 古代に素材を求めたことが、現代の人生や社会の問題を追求する上でどのような効果を持つかを考えさせる
(2) (1) 八首のうち、小式部内侍の「大江山……」の歌に関して 作歌事情を「十訓抄」の説話を読み、歌の背景を考える 当意即妙、その機知・才気をとらえる	(3) (2) (1) 特に助動詞に注目して通釈を試みる 段落ごとの内容を要約する中で、読者の興味をつなぎながら結末に至って種明かしする筋運びのうまさを見い出す 観恩譚としての性格をつかみ、他のこれに類した話を読み古文に慣れる	(2) ③ 芥川が「今昔物語」をどう読んだか、それを彼のものとしてどう創作したかを考える 女の境遇設定のちがいは 芥川がなぜ原典をこのように改めて作品に設定したか、その理由を考える
十訓抄第三訓 「不可侮人倫事」 の第一話 補助プリント	動物報恩譚の例として 「山城の国の女人 観音の助けに依りて蛇難を遁る語」 (今昔物語卷十六 第十六話) 補助プリント	十一話 「太刀帯の陣に魚を売りし姫のこと」を参考に読ませる

右の表にみるごとく、これまでの学習指導記録から言えることは、まず、説話を教材としての実践事例がきわめて少ないことである。遊離説話については、古事記を除いては意識的に取り扱った事例はない。

扱う時期としては、古事記などの遊離説話は別として、そのほとんどを低学年で、しかも古文入門期に扱っている。入門期の扱いはどうしても語彙・語法の指導に利用するという結果になり、また、おもしろみを主眼としたもの、珍奇なものなどによって、古典の世界に興味を持たせるために利用しているということが言える。したがって、発展学習のために関連した教材(投げ入れ教材)を選ぶばあいは、おのずからおもしろさ・珍奇さの視点から選ぶことになっている。指導のうえでは、近代の小説、特に芥川作品などを引きあいに出現して興味を起こさせたりするばあいが多かったし、逆に現代国語で近代小説を扱えばあいい、その小説の理解を深めるために説話を利用するばあいもあった。(前掲の表、四十三年度の欄を参照)

このように見てくると、わたしのばあいい、説話を本格的な古典文学として掘り下げて追求するという実践がこれまでほとんどなされていない。

芥川龍之介が、「今昔物語に就いて」という文章の中で、「僕はやつと今昔物語の本来の面目を発見した。……今昔物語の作者は事実を写すのに少しも手加減を加えていない。これは僕等人間の心理を写すのにも同じことである。尤も今昔物語の中の人物は、あらゆる伝説の中の人物のように複雑な心理の持ち主ではない。彼等の心理は陰影に乏しい原色ばかり並べている。しかし今日の僕等の心理にも、如何に彼等の心理の中に響き合う色を持っているであ

ろう。……作者の写生的筆致は、当時の人々の精神的争闘も、やはり鮮かに描き出している。彼等もやはり僕等のように娑婆苦の為に呻吟した。……今昔物語は最も野蛮に、一或はほとんど残酷に彼等の苦しみを写している。」と述べている。

芥川のこのような、説話を読む「読みの鋭さ」が彼の王朝物と呼ばれる作品群を結晶させたと言えるであろう。同時に、人間的なものの追求の激しさと現実を見る目の鋭さとのゆえに不安と絶望とにあえいだ彼でもあった。芥川以後半世紀近くにもなろうとする今日、あらためて彼に学ぶことが今のわれわれにとって性急な課題となっていると言えないであらうか。

芥川が述べているとおり、説話は人間の内面描写ぬきで、登場人物の行動とことばだけを写生的に描きながら、人間の内部やそれととりまく社会の現実などを探りとり、語っていく。

これまで古典教育における本格的な教材としては締め出されてきた形の説話文学に、新たな照射を合わせ、その領域の深さと豊かさについて思いを致さねばならないと思う。

III 説話教材取り扱いの観点

最近、熊谷孝氏が「古典で何を教えるか」という文章の中で次のように述べている。

「古典を文学として教えるということは、そのすべてを肯定的に受け取らせるということではない。過ぎ去るべくして過ぎ去ったもの、現代がそれを否定し去るべきものは、そのように評価させるべきである。が、そのようなもろもろの否定的要素と交り合いながら現代が見失ってはならないにかかわらず、見失いつつあるもの、

すで見失ってしまったもの、それを発掘させ発見させることが、
文学教育としての古典教育の果たすべき大きな役割の一つだろう。」

熊谷氏は、右のような観点からする教育が「文学教育としての古典教育の果たすべき大きな役割の一つ」と述べているが、確かに、果たすべき役割の一つであつて、それがすべてではない。われわれは、古典としての「古文」の指導という形で、非常に多くの指導項目を、年間指導において消化し徹底することが要求されている。しかも、その指導項目のおのおのがきわめて重要であるため、そのうちのどれに重点をおくかを決定し、すべての指導をそれに向かつて結びつけて行くことに意を用いなくてはならない。

そのためにそれぞれの指導事項に最もふさわしい教材を選び、重点的に、しかも螺旋状に高める指導の体系を求めながら歩まねばならない。その指導の体系の中ではじめて生徒は学習の視点が定められ、教師の指導もその効率を高めうるのだと思う。

ところで、熊谷氏いうところの「もろもろの否定的要素と交り合いつつあるもの、すで見失ってしまったもの、それを発掘させ発見させる」ための教材の一つとして、わたしは説話教材を取り扱いたい。高校古典教育のうち、その何回かは、古代における庶民大衆の現実について、真剣に考えさせる機会を持つべきである。そのことが、その時代社会の中で庶民がどう生きたか、ということを考えさせることになり、ひいては次の世代になう若い生徒たちの民族的・民衆的人間としての成長に資する糧の一端ともなつてほしい、とのささやかな願いからである。

注(1) 現代が、われわれの祖先たちの苦しい道程の上に積み重ね

られた結果だという民族的・伝統的自覚をもつた人間
(2) その時代社会を支えて来たものは、一般の庶民大衆であり、その現代および未来における一庶民であるとの自覚をもつた人間

IV 説話教材選択の視点

説話を単に古文入門のための教材としてではなく、鑑賞・批評を中心として取り扱うばあい、文章表現の展開に示されている作者または作家大衆の現実把握の発想のしかたと、学習者個々の現実把握の発想のしかたとを、対決させ、格闘させることにたえうる教材を選びたい。説話教材を扱うばあいは右のような指導の視点が設定できると思うからである。

説話のそれぞれには、多少とも文学としての興味は加わつてはいるが、それらはいくまで伝承文学の一領域にとどまつていると言える。個人作家の創作意識がはつきり働いている小説の域には、まだ達していない素朴なものである。したがつて、説話は一方では、広い庶民大衆の層に根をおろしているとも言えるが、反面、個性味がうすく、芸術味も比較的乏しいものが多いことは否めない。教材としての価値を考へるとき、その欠点も少なくはない。けれども、作家が民衆全体であり、またはその代弁者としての個人であるだけにかざりけのないありのままの時代大衆の考え、好み、慣習、信仰などを如実に表現しており、それらを明快に読みとることができるとは、教材として大きく評価してよいと思う。

仏教説話には因果応報の理、あるいは教義を主張することばが付加されている。一般の世俗説話においても、道徳的、教訓的色彩が著しく見られる。これらについては、説話を生んだ時代を抜きにし

て考えることはできない。このようなところから、無数にある説話群の中から、教材としては、説話としての本質的性格（そのうち特にその時代社会を反映し、民衆の心を代表しているもの）を備えた作品を選びたいわけである。

つまり、一つには学習者の問題意識にうったえかけ得る作品、

二つにはその時代社会を反映し、民衆の心が読みとれる作品、を選びたいと思うのである。

注(1) 益田勝実「説話文学と絵巻」

「説話文学は説話そのものではない。説話は口承文学の一領域である。普通の文字による文学のように、作家が直接に自己の内面的事実や社会の現実と直面して描き出す文字ではなく、かれが、口承のはなしという一つの、すでにある文学の方法で貰かれていた伝承としての現実的存在に、自己を対置させて行う文字による文学創造である。」

われわれの扱う説話は、益田氏の説によれば、いわゆる説話ではなくて「説話文学」ということになる。

V 学習指導の展開例 — 四十六年度

今年度（四十六年度）は、第Ⅱ節でみたこれまでの実践の反省に立って、説話教材の取り扱い方を根本的に考え直してみようとした。次にあげる実践例は第Ⅲ節、第Ⅳ節で述べた取り扱い扱いの観点、教材選択の視点に立って展開しようとしたひとつの試みである。

一、教材 「清水観音利益のこと」 （出典「沙石集」）

二、対象・時期 第三学年二学期

三、学習指導の背景

(1) 使用教科書 高等学校 古典乙Ⅱ古文三訂版（角川書店）

(2) 単元名 説話文学

(3) 単元の位置

古典乙Ⅱの単元配列を考えるにあたっては、ほぼ教科書の配列に従っている。まず、古代前期の作品を扱う単元として一学期冒頭に「古事記」（倭建命）を置き、続いて「万葉集」二十一首（雄略天皇、有間皇子、柿本人麿呂、志貴皇子、高橋虫麻呂、山部赤人、大伴旅人、山上憶良、狭野弟上娘子、大伴家持、東歌、防人歌、旋頭歌）を配列した。次に古代後期の作品を扱う単元として、「土佐日記」（門出、黒鳥、幣の追い風、帰京）「蜻蛉日記」（序、父の旅立ち、心憂き世、道綱の元服）、二学期になって「源氏物語」（桐壺、帚木、明石、螢、若菜上）を学習させた。これら古代後期の作品の世界は貴族社会に限られ、「源氏物語」では特に、満ち足りた貴族たちの生活・恋愛の諸相が、相当量の教材としてうち続き、やや単調となった。その次に位置させたのが、説話文学である。中世庶民の登場する作品によって、古代後期から中世にかけての時代相の一面をとらえるとともに、その時代社会に生きる人間の姿を読みとらせるように考えた。

四、指導の目標

(1) 当時の庶民の願いを読み取る（その歴史的現実には生きる民衆の願いは何かを知る）。

(2) 説話文学の本質をつかむ。

五、学習活動の概況

一 限

A、導入

説話文学の範圍、その共通する性質、説話文学の文学史における展開のあらましを説明する中で、「沙石集」の文学史的位_置とその特質について、簡単にふれておく。―既習の「古事記」の中の遊離説話の想起を發端として、「日本書記」「竹取物語」などの遊離説話、さらに「風土記」の性格を考えさせ、「大和物語」と「伊勢物語」の性格を比較させたりして説話文学の範圍にふれながら、平安朝初期に現れた仏教説話集「日本書紀」が説話文学の源流をなし、後の中世説話文学をよび起こすことになるなど。平安末期の「江談抄」「打聞集」さらに高一で既習の「鈴鹿山において蜂、盗人を刺し殺ししこと」の「今昔物語集」を想起させ、これによつて中世説話文学の足場がきずかれたこと。そしていよいよ中世説話文学、その色彩によつて世俗説話と仏教説話に二分され、各々を説明する中で、「沙石集」の位置と性格を明らかにする。―

B、展開

上代文学や平安の日記類、源氏などを読んで来た生徒たちにとつて、説話の文章は、多少の難解語句があるにしても、通読して文脈を把握し話のすじをつかむに、大した抵抗はない。

(一) 朗読→黙読→話のあらすじの發表

(二) 中世独特の語彙に注意させながら、教師がさつと通釈する(部分訳を生徒に指名しながら)

(三) 課題を提示して話し合いにはいる(話し合いグループで話し合った後、そこで確めた自分の意見を全体へ報告し、皆で考えを深める形)
提示した課題

清水観音利益のこと 課題五つ

- 一、(1) 85ペ3「このこといかげあらんと、かへすがへす思ひ煩ひけれども」―この「思ひ煩ひ」は、どういう心理か。
- (2) 同、「たしかの示現なれば、たとひ、いかなる恥がましきことありとも、いかにせむぞと思ひ切りて」―この「思ひ切り」(決心)は、何がそうさせたのか。
- 二、85ペ9「なほざりに言ひかければ」(武士)と、「まめやかに思ふ由、言ひける」(女房)とを比較して、この男女の気持ちを考え、特に女の気持ちの中にある当時の庶民の願ひは何か。
- 三、87ペ9「互ひに袖をしぼり、いよいよ打ち連れて」における、この感涙の意味するものは何か。
- 四、作者はいつたいどういう意図があつてこういう話を書きとめたのか、また、この話を聞いたり読んだりする庶民は、そのことによつて何を待たと言へるか。
- 五、現代という歴史的現実_に生きるわれわれを、この説話の世界の庶民になぞらえろとしたら、その願ひはいつたどのようなものと言えようか。

四 話し合いの展開—その一例(抜粋)

(次の記録は、話し合いの展開をテープにおさめ、再生したものである。表現は紙数の関係もあつて、丁寧語をいっさい省き、一部削り改めたが、ほとんど生のままである。)

Aは生徒、Tは教師の発言である。)

(1) 課題一、課題二、について確認して、主人公(女房)の心理とその背景とを、表現に即して考えさせる。

(課題二、についての展開)

T、まず、武士の気持ちから。

A、やっぱり、きれいな着物を着た人が、一人で歩いていたら、

それが女の人だったら、やっぱり男として声をかけてみたい。

(どつと笑う)

T、女の気持ちの方は……。

B、貧乏していたから、なんとくなげやりのな気持ちになつて、

こう……どうにでもなれという感じがあつたのではないか。それ

ともう一つは、示現によつてこういう仏のこぼを聞いた直後

だつたから、それに流されるというか、そういう勢いによつて、

ということもあるんじゃないかと思う。

T、……ところで、女主人公によつて代表される当時の一般庶民大

衆が、どういうことを願っていたのか。そういう願いの内容に

ついて具体的に考えてみよう。

C、この女の人を中心に考えると、自分には身よりもなくて、貧

困でもうどうしようもなくなくて、仏に頼るほかなく、仏を信ずる

ということによつて、すばらしい夫を得て幸福な家庭を築きた

い。そういう気持ちが強かつたのではないか。それから、都に自分縁のある人がいるとか、都中心の考え方で、都に自分の親類縁者がいるということがすばらしいことで、そういうこともあるんじゃないか。

D、その女の方は、さつき言われたような幸福な家庭を築くとか、

そんな具体的なものではなくて、その頃は全くのどん底であつたから、とにかくその生活から抜け出させてほしい、何か少しでも希望があつたらすぐそちへ行くような、そこまでどん底であつたと思うから、とにかく今の生活から抜け出させてくれるなら誰でもいい、(どつと笑う) というようなそんな気持ちだつたと思う。

T、……つまり貧困からの脱出という切実な願いがあつた、という

こと。ところで視点をかえて、そこに現われた相手はどういう

人であつたか、と考えてみると、武士大番衆であつたわけで、こ

れについては話し合いがあつたか。

E、大勢の供を連れた、わりあい裕福そうな武士で、それでやつ

ぱり教養とか階級、富みというようなことも手伝つて、それが

わりあい満足できそうだから、まあこの辺でいいんじゃないか

という……。 (どつと笑う)

F、この女房から見たら、武士というのは自分とは違つた世界に

住む人であつて、身体も大きくたくましいであらうし、それか

ら荒々しい男の魅力もあふれていただろうし、自分が今住んで

いる世界と別の世界の間に対する好奇心みたいなものがあつ

て、その好奇心と、その男に対する執着というようなもの、そ

ういう本能的な欲求というか、そんなものが女の人にあつたの

ではないか。(みな笑い最後のことが聞こえず)

G、

F君のことも関連するけれど、当時は平安から鎌倉にかけて、これはまあ鎌倉時代だけれど(笑い)、貴族という地位が低落して、武士という階級というものが高く評価されて来たといえると思う。そういう時にその女が武士と、というのは……、何というか、これから活躍するであろうと思われる武士という階級、それは現実的な、打算的な、そういう利益を得たいという、だからその女は、なぜやりの、打算的な人で、そういう女は僕としてはとらない。(どつと笑う)

T、

……当時は武士の時代で、力によらずにはどうしようもない。今の意見にもあつたように、当時、貴族階級は頹廢していたわけで、隆盛する武士の力は非常に大きく世の中に認められていた。そういう武士にすがりたいというのは女性の、ひとつのあこがれであつたと言える。同時にこれは、この一女性に代表される当時の人々には、武士に頼つておれば大丈夫だという、そういう武士の力の陰に身をひそめようというか、そういう願いがあつたと言えよう。もうひとつは前に出たように、貧窮から何とかして脱却したいという願ひ。戦いによる世の乱れ、貧窮と飢えを身をもつて知つている当時の民衆の大きな願ひは、まず生活の安定、次に、できれば武士の力の陰に身を寄せたい、これらは全く切実な願ひであつたであらう。そのことをこの表現は物語つていと言えよう。

(2) 課題三、について確認して、主人公とあるじ(衣の持主)

とが互いに流した感涙の意味を、表現を通して考えさせる。

H、

(課題三、について)

よくわからない。ただ、都に人こそ多きに、かく親しくなりまゐらせぬらむ」という表現からして都の親しい縁のある人とのつきあいができたということに対しての喜びなのであらうか、というようなことを話し合つた。きつとそういう願ひがあつたんじゃないかと思う。その願ひがこの世においても叶つたから、それも自分がいつもこうやって清水寺へ参つて修業していたことで叶つた、というその喜びで涙が出て来たのだと思う。

F、

これは、実際にそういう親しい人が得られたという現実的な喜びもあるけれど、それを得られたというのは、一種の、僕は邂逅だと思ふ。……めぐりあい。(笑い)それで、そういう社会的に混乱した時期に、自分の生活もあぶないし、もう何も頼れるものがないという時に、仏の力によつてある人とめぐり会うということは、何か一縷の光をみつけた時のような……、だから、仏に帰依して、実際にその力が自分の上に及んで、そういう人とめぐり会えたということが感激だつたのだと思う。

I、

あの、質問がある。一番よくわからないのは、このあるじの方で、着物を盗まれて、それでもつてその盗人に会つて……、その、まあただ女性だから五十両もらつたということ……。(どつと笑う)

T、

五十両もらつたのであるけれども、とにかく盗んだ人に会つて喜ぶのはおかしい、こういうことだね。その点についてはどうか。どういうふうに解釈したらいいのだろうか。

J、

今の、現代の考え方でいくと、そういうようなことが考えられるんだけれど、昔のばあい、仏というものが、あたしたちの

中にあるよりもっと大きく作用していて、仏のお導きみたいなもので、(めぐり会えたのだから)、盗まれたということが消えてしまつたんじゃないか、と思う。

T、盗まれたというけれどもそれが実はきつかけとなつて、さきほどの「邂逅」が成就した、これはありがたい、ということがなるんじゃないか、という意見だね。ところで、そういうめぐりあい、これを非常に感激として受けとつていらっしゃるんだと、こういうことが先ほど出て来たのだが……。

K、確かにめぐりあいもあると思うけれど、その当時は京都なんかも荒れてから、まあ、生まれた土地ア荒れ放題、というわけだ、……(どつと笑う) 仏は本当にいらっしゃるかどうかという疑問があつて女の人(女主人公)がひたすら信仰していて、その結果、自分の生活も豊かになつたし、こんな人にもめぐりあえた、その世の中に信じられるものがあつた、という感激じゃないかと思う。

T、……要約すれば、そういう世の中であるから、もう信じあえる者がいなくなつたんじゃないか、ということだね。いま最後の意見にも出たが、そういう先ほどの邂逅は、信じあえる人ともめぐりあえた、ということ。このところを読んでみると、「かかるにつけては、わが身のこと、ありのままに申すべし」というふうに言つて、自分の身の上のことをありのままに述べあえるような、そういう人間関係というのは当時なかつた、と考えられるね。戦乱の世の中、すべてが敵の世の中で、ほんとうに信じあえる人、何でも話し合える友というようなものは切望の極みであつたに違いない。そこで、感涙を流したというのはう

なずけるんじゃないか。当時の人々はそういう人情にうえていたわけだね。情けというものが廢れていた世の中だつたと云えるね。

(3) 課題四、について確認して、特に当時の庶民の現実についてさらに考えを深めさせる。

(課題四、について)

L、僕が思うに、当時はかなり世の中が頹廢していた、頹廢とか荒廢して、その当時一般庶民というものは、何ら精神的支柱をも持ち得ず、索漠たる気持ちで過ごしていたので、そういう貧しい一般庶民たちを救う、というか、仏によつて精神的な支柱を植へつける、で、庶民たちを救おうとしたというのが作者の気持ちであろう。庶民たちの心情というのは、そういうのを讀むことによつて利益を得るというか、そういうものを通して精神的な支えを得る、その支えを持つことによつて今のようにな荒れ果てた世の中から離脱しようということはないかと思うけれど、のがれようとする、そういう感情を持っていたと僕は思う。

M、單純に考へて、宣伝文句だと思ふ。普通のお経だつたらむつかしくて庶民にわからないから、それをこまぎれに、わかり易く、子供にかなでふくませるようなぐあいに教えたものじゃないかと思ふ。

T、なるほどね。こういうご利益があるんだから、とにかく信じなさい、とこういうことだね。この説話を語る方からすれば、とにかく信仰させたいんだから、そういう宣伝の気持ちが含まれていることは確かだね。けれども庶民の側からすればそうい

う宣伝文句と知る知らぬは別としても、それにくいついて行つてそれを聞く、あるいはそれを本気で信じる、と、こういう状況に立たされている庶民の立場、その境遇、環境というものが問題になるわけだ。だから庶民の側から言へば、奇跡を信じる以外にはない、そういうほんとにぎりぎりの追いつめられた段階におかれていたんではないか、というわけだろう。だから、こんな話を聞いても、あるいはそんなことはあるはずがないなあ、と思ひながらも何かその将来に対して明るい見通し、光明を求めないと生きて行けない。だからこれは極言すれば、一つの慰みにすぎなかつたであろうと考えられる。が、まあそういう慰みでもして、このみじめな現実をちよつとでも忘れようとした。——といったような非常に荒廢した、精神的にも経済的にも荒廢した世の中であつたんだと、そういうことが考えられるね。ということ、中世のその当時はいろいろな信仰がもてはやされ、本気で信じたと、こういうふうなことになるて行くわけだろう。……

(五) 課題五、について確認して、説話の世界の庶民になぞらえるとしたら、われわれ現代の一庶民の願ひはいったい何か、個々の内部にふり返つて考えさせる。

(自宅学習で、四百字詰め二枚以内の短作文として提出する) どのように指示する)

(1) 短作文の例 (抜粋)

(その一)

現代人の最大の願ひは生き甲斐を持つことだと思ふ。この説話の時代の人にとつては実生活と生き甲斐とが一体のもの

だつた。どうしようもない貧困の中で、思いがけず腹いっぱい食べられた、それだけで彼は満足したのでろう。衣食住そろつた後で何をしようかなどとは考えもしなかつたのである。常に与えられた環境と闘ひ、自分の手でその日その日の自分の生存を勝ちとつて行くのだ。何となくましい、生気にあふれた生き方だろう。ところが現代人にとつて、実生活(このばあい、生計、あるいは肉体的生活とも言えよう)と生き甲斐(こちらは精神的な生活)とは、ほとんど分離してしまつてゐる。つまり、人はその生命をかけてまで一途に働かずとも食つてはいけるし、適当な遊びもできる。衣食足つたその後で、さらに何か精神的充足を求めており、それが容易にみつからない。現代人は退屈しているのかも知れないと思ふ。

現代人は、人情に飢えている。昔の人は騒然たる状況のもとで、あるいは憎み、あるいは疑つたりしたことだろうが、お互い仮面をかむらずに争つたと思ふ。いわゆる取つ組み合ひの喧嘩だから、誤解がとけたら本心が通うだろう。ところが今の人々は、どんな時にも自分は傷つかぬように、自分自身を閉ざして、うわべの付き合いをしているから、大喧嘩はしないが、友達もできない。おかしい言い方だが、相手の頭をボカリとやれるほど、人に対しても自身に対しても誠実ではあり得ないのだ。いくら世の中が豊かになつて、人が物質的には独立して生活できるようになつても、人は精神的には孤独でいられないものだ。今はとてもさびしい時代なのである。

(その二)

説話に描かれている庶民は、元寇などの戦乱によって生活破壊され、あまりにもひどい貧困の中で追いつめられ、心もずさんで、究極的には生きること自体を仏にゆだねていった。彼らは当時社会的地位の高かった武士の妻になることによつて、そのどん底の生活からぬけだしたいと思ひ、また、そういう荒廃し、人の心もずさんでいる世の中にあつて、一人でも心をゆるし合える人、信じ合える人がほしいと切望していたのだつた。ところで、現代に生きる私たちが今、一番望んでいることは何であろうか。今日、日本は飛躍的な経済成長をとげ、物質的にはかつて考えられなかつたほど豊かになつた。しかし精神的な面においてはちつとも豊かになつてはいない。それどころか、かえつて荒廃していつているようだ。この説話の世相と少しも變つていない。世の中にうそが渦巻いてゐる。人は少しでも隙があればつけこもうとねらつてゐる。信じてゐることが出来るものは何もない。ざらざらした人間関係、まるで荒涼とした砂漠のようだ。

それでは今、何が私たちを救つてくれるだろうか。この話の主人公のように神仏にすがることがもうできない。それには私たちはあまりにも複雑な価値観を学びすぎたから。今、私たちがほしいものは、一人でもいい、ほんとうに信じ合える人、心をゆるし合える人、いっしょに涙を流してくれる人だ。今、私たちは一人ぼっちだ。どうしようもなくさびしい。私たちは愛に飢えているのだ。だから今こそ、精神的に荒廃した今日だからこそ、ほんとうに信じ合える人、やさしく包

んでくれる愛が必要なのだ。

(その三)

日本が豊かになつたおかげだろうか、私の両親がまじめに働いてくれるおかげだろうか、私はまだ飢えというものを知らない。貧困のどん底ということもピンとこない。想像力も体験も大して持ち合わせてないのでそれは当り前かも知れない。そんなことから、説話に書かれてある鎌倉時代の庶民の生活というものもわかつたようではわからない。「どん底」がわからないのは幸せなことなのだろうか。切迫した状態、ぎりぎりのところかわからないことは不幸なことではないだろうか。何もわかつちやいない青くさい疑問だと自分でも思う。でもなぜか、私にはまだほんとうに生きたい!!と意識した経験のないのを寂しく思う。「恵まれた暮らしの中で育つた甘さ」がにじみ出ていよう。思うに私は生きることに真剣になつていないのだ。(無意識の世界では激しく生に執着しているのかも知れないが)時々ひどくめんどうになつてくる。まるで投げやりになつてしまふこともある。……これも養つてもらつてゐる身の甘さ故だろう。こんな私が、時々熱に浮かされたように、「このままでなるものか。もつとよく、より充実した人生をもちたい」と思うことがある。だが、その後ですぐ「よりよい」とはどういうことなのか全くわかつていないことに気が付き、また諦めに似た感情でおおわれてしまふ。何という意気地のなさか。弱い。

(2) 短文文にみられる現実把握の発想の類型

右にあげた三つの作文はその代表的なものであるが、短文文を読んでみると、彼らの現実把握の発想のしかたには大きな類型があることに気付く。その現実把握の型を次のように分類して、それぞれの占める割り合いをみようとした。

① 温かい人間と人間をむすぶ絆がほしい—(四二%)

疎外、孤独、自己中心で連帯感の喪失、親子の断絶、といった現代。仮面をかむった付き合い、心の友を持たない、人間のまごころに飢えている、精神的に豊かになりたい。すさんだ心から脱却したい。人間相互の断絶の中で、神仏をも失った現代人にとって、中世人以上に人間同志の心のふれあいがほしい。ほんとうに信じ合える人、いっしょに涙を流してくれる人がほしい。などなど。

② 生き甲斐がほしい—(三四%)

現代人は生きる目標を失っている。自分の可能性を何かに託したいのにその何かを見出しかねている。中世人には信仰というせてもの心の支えがあったが、現代人には信じられるもの、精神の支柱になるものがない。したがって情性で生きる人間が多い。現代人は切実な願いを持つことを切実に願っていると言えるのかも知れない。などなど。

③ 現代の社会悪からの解放を—(一一%)

物価高、公害、交通戦争、住宅難、核実験、戦争、差別、受験競争、などから人間性の回復を求める。福祉対策によって老人問題、蒸発人間の防止などを要望。

④ 安定した生活がほしい—(九%)

適度な富みを得て幸福な家庭をつくりたい。他に侵されない

六、 反省

⑤ 平和なマイホームをつくりたい。など。
その他—(四%)

生徒が説話をとらえるばあい、他の古典をとらえるばあいとほぼ同様に、概して観念的なとらえ方になっている。その原因は何よりも貧・苦への切実感のうすれがあげられるであろう。彼らはあらゆる想像力を働かせて、実に柔軟に自由自在に古代人の現実を把握することに努める。けれども、みずからの体験にもとづくそれほどの切実さがないので、その理屈が観念的にかすめ過ぎることになる。したがって追いつめられた人間の立場からする問題把握が容易にはなされない。しかし、それを現代のすべての高校生に求めること自体が無理なことなのだ。その時代の人びとの生き方なり感じ方なりを一度自分のなかで再現してみるといふ操作を行なわせることがいかにもつかしいことであるかを痛感する。同時に、本来の読者の次元において作品をつかむ教師の操作と、教師がまたその生徒たちの媒介者として、その本来の読者の次元をどう媒介するか、というそのところの任務のむつかしさを感ずるのである。

ただ、そういう中で、生徒自身自分がその環境におかれたならばとか、そのことについて自分なら、とか、現代でも同じようなことがあるのではないか、とかいふ発想のとらえさせ方、扱いは、生徒の心から何ものかを引き出し得るといふことは言えそうである。生徒の話し合いや、提出された短作文を読んでいるで感じることは、説話の内容に触発されて、自分たちの

現実を見つめる結果になつてゐるということ、これは確かにひとつの事実である。他人事でなく、自分自身のきびしい現実のある面を、説話の世界の人々の現実の中に見出して、自分たちの生き方について考えようとしている。そこに教師としてのささやかな満足を見出し、それに支えられて明日への取り組みに励まなくてはなるまい。

今は、あるわかり方でしかわからせることができないが、しかし将来何かの折に、本人がふとその事に気付くこともあるだろう、と考へて、その日のためにその足がかりを用意する、という発想の教え方も必要だと思ふ。

VI 今後の課題

さきに述べた取り扱ひの観点や教材選択の視点から、無数の説話の中からそれにふさわしい教材を選び出す作業が、何よりもまず行なわれなくてはならない。適切な教材を探し出す労力と時間とは大へんなものであるが、古典教育の創造のためには、われわれはそれをいとわず積極的に、しかも精力的に行なわなければなるまい。今後わたしが取り扱つてみたいと思ふ説話を、目にふれた限りにおいて取りあげて考へてみたいと思ふ。

「今昔物語集」巻二十八の第五話「越前守為盛、六衛府の官人をしたがへたること」などは、その時代社会を反映したものとて逸することのできないものであらう。生徒にとつても愉快でたまらなくなりそうな話である。ただ、笑いこぼした後、冷静になつた心に刻まれる何かがある筈で、その何

であるかを考えさせてみたい。六衛府の下級官吏たちが「平張りの具ども持ちて」越前守為守の家におしかけた時のできごとを、滑稽に描写しながらも、その底に摂関政治全盛の時代の歴史的現実が伝えられていると言へよう。律令体制の行きづまりの中で、その制度に内在する矛盾と民衆の貢納回避によつて、彼ら下級官吏たちは、ただひとすじにわずかな俸禄にすがつて生きねばならなかつた。しかもその俸禄が常に危険にさらされていた。そこには、人間の弱点をさらけ出させる人間喜劇がある。

同じ「今昔物語集」巻十九の第十四話「讃岐の国多度の郡の五位、法を聞きて即ち出家せること」も、古代律令政治の崩壊過程の救いのない社会生活の一面をとらえるに適した教材だと思ふ。主人公源大夫は「其の仏、心広くして、年ごろ罪を造り積みたる人なりとも、思ひ返して、一たび『阿弥陀仏』と申しつれば、必ず其の人を迎えて、……」という講師のことばによつて、荒々しく凶悪な男の中に隠されていた人間的なものへの憧憬をよみがえらせる。民衆の心とその構造、わたしたちの中にあるものの最も端的なあらわれを、源大夫において見ることができよう。讃岐の源大夫の話は、「室物集」「発心集」住信の「私聚百縁集」などにも見える。教材としては、「今昔物語集」のものが最もふさわしいと思ふ。

「今昔物語集」の発心出家譚の類は数多く、特に巻十九の内容のほぼ半分がそれで、良峰宗貞（僧正遍昭）の話を最初にかかげて、以下いかに道心をおこして世を捨てたか、という次第を語る出家の物語である。この遍昭出家の物語は、当

時の人々の心にあわれを催させた話であったのか、古今集詞書をはじめ、「大和物語」「宝物集」「十訓抄」「沙石集」に伝えられている。同一の説話が各々の作品において作者によつて、時代の変遷により、どういふ差異を生じているか、そのあとを生徒に比較してとらえさせる扱ひも今後の課題である。

「今昔物語集」には卷二十を境に、その前後に語法的に大きな差異があり、素材や発想においても卷十五の往生談の前と後ではかなり大きな文学としての違いが指摘されている。

「今昔物語集」後半部の往生談、出家談、強力談、武將談、盜賊談、滑稽談、奇異談などの中から、王朝貴族文学には全く見られない新しい文学的人間像の形象化を取り出すことが可能であろう。それらは、地方的庶民的な説話の発想が指摘される。

儒教的なおいのする「十訓抄」をはじめ、「宝物集」「発心集」「選集抄」「沙石集」など鎌倉時代の仏教説話集には、教訓、啓蒙、自省などを記述する中に、批評的発想が読みとれる説話が少なくない。これらの説話は、唱導や説法の間では、講師の口から例話として語られたと考えられる。そのための資料として用意され、集められたであろう。「今昔物語集」や「宇治拾遺物語」のような説話においても言えることだが、特に前述のような仏教説話のばあいは、説話末に添えられた感想や批評が優勢になると、説話そのもの持つ批評性を破壊する恐れがある。したがつて、教材として取りあげるばあいは、作者や編者が添加した批評、感想は除外した方がよい。

説話そのものに内在する批評性を読みとらせるところに学習指導の力点を置きたいからである。そこに力点を置かない説話の取り扱ひは無意味だと言つても過言でない、と私は思つている。

先般の研究協議会において、「清水観音利益のこと」（沙石集）に登場する女主人公「女房」は当時における庶民とは考えられないのではないか、という議論が出された。これは、説話教材を取り扱うばあいの大事な一面を孕む問題だと思われるので、ここで触れておきたい。ここに記述されている「女房」は、いわゆる平安朝における女房と性格はやや異なるにせよ、その流れをくむ中世におけるそれであることに違いなからう。その意味では「庶民」とは言えない。しかし、この説話で語られる女房は、院政以来の不安動搖のはげしい世にあつて、公卿も武士も庶民も生きとし生ける者すべて希望を失ひ、暗い絶望的な心を抱いた、それら大衆を背景として登場させられた人物である。文永、弘安の役とうち続く戦乱の中を生き抜いた当時の民衆の姿や心の真相を基盤として造型された人間像であることに思い至らねばなるまい。関東そだちの無住法師が各地をへめぐつて歩きながら、それまででは「ひとの国」などと呼ばれて軽蔑されていた地方の庶民たちの、新鮮な口がたりのかずかずを彼の立場において結集したのが「沙石集」であり、いっさいに中世説話は貴族社会圏から一步はみ出した広い世界の民間説話の集録であり、ひろく庶民の世界へかかわる説話集である。したがつて、この「女房」は、大きな時代の激動の内側に停滞してゆるが

ぬ底の意識、人間のもつ日常性の実態感覚というものの形象化であり、そこに作者無住の冷徹な批評眼を読みとることができるのである。これが、説話そのものに内在する批評性であろう。その批評精神を読みとらせ考えさせようとする営みこそが、説話を素材としてする古典文学教育の基本的姿勢であらねばならない、と思う。

この姿勢に立って、深くて豊かな説話の世界に切り込んで、それを教材化し、民族の遺産を有効に生かして、民族的、民衆的人間形成に資する古典教育を創造して行くこと、これがわたしの今後の大きな課題である。

注(1) 「国語と国文学」(昭16・10)

(2) 永積安明「中世文学の展望」

なお本稿は、昭和四十六年度広島大学国語国文学会秋季研究集会、国語教育研究協議会において報告・提案した資料に加筆したものである。

(広島附屬福山高等学校教諭)